院内学習会 9月3日　衆議院議員会館

主催 食と農から生物多様性を考える市民ネットワーク（食農市民ネット）

～生物多様性を守るための新たな段階に～

「2018年遺伝子組み換えナタネ自生調査院内学習会」が東京で開かれ、グリーンコープから組合員など11人が参加しました。全国からGM食品に反対する団体・個人が集まり、環境省、農林水産省、厚生労働省、消費者庁の職員と意見交換を行いました。

まず、市民団体、環境省、農林水産省それぞれが実施したGMナタネ自生調査について、報告を共有しました。次に、急速に開発が進むゲノム編集などの新技術について学習しました。その後、新技術により開発された食品の安全規制と全面表示を要望し、政府へ意見書を届けました。

真逆の見解となった国のGMナタネ自生調査

報告をする若松地域理事長

生協などの各市民団体は、38都道府県で自生GMナタネの汚染調査を行い、9県でGMナタネの自生が見つかったことを報告した。

グリーンコープからは、ふくおか福岡地域理事長の若松由香さんが2018年度の調査のようすや、くまもとが行政に働きかけを行った結果、自治体の理解や調査への参加も増えつつあることを報告した。

「遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン」は、14年間調査を継続する中で、①ラウンドアップとパスタ両方の耐性を持つナタネの出現②輸入港から遠く離れた住宅地でのGMナタネの自生③検査キットでは陰性だが二次検査では陽性を示す「隠れGM」を確認した。これらはGMナタネの汚染が広がっていることを意味し、近縁種の野菜との交雑など環境への影響が危惧される。今後も調査を続け、GM汚染の実態を明らかにしていき、市民の力で広く知らせていくことが重要だと訴えた。

環境省と農林水産省でも調査を行い、GMナタネの自生を確認している。しかし農林水産省の報告では、生育範囲の拡大や近縁種との交雑などは確認されておらず、生物多様性への影響は認められないとのことだった。その報告に対して市民団体からは、農林水産省はごく一部の地点しか調査しておらず、生物多様性への影響がないことを確認するための調査なので、そのような結果になるのではないかとの意見が出た。

ゲノム編集技術への規制を求める

米国では規制がされないまま、ゲノム編集技術を用いた生物が次々と開発されている。日本で、食品として流通することになれば、表示が無いまま食卓に上ることになる。

「遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーン」、「特定非営利活動法人日本消費者連盟」、「食の安全・監視市民委員会」は連名で、緊急に「ゲノム編集技術など遺伝子操作技術の規制を求める意見書」を提出した。環境省は「ゲノム編集技術の対象、対象外の整理を終えた段階である」と回答。参加者からは、「カルタヘナ法が作られた時には、ゲノム編集技術という概念はなかった。ゲノム編集技術の安全性審査には、全く別のシステムを作る必要があるのではないか」との意見が出された。

※遺伝子組み換え生物等の使用について規制する法律。2004年2月から施行

当日はゲノム編集技術についての学習をしました

ゲノム編集を考える

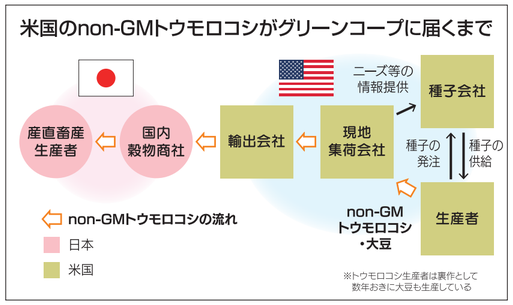
食農市民ネット共同代表
河田 昌東（まさはる）さん

ゲノム編集技術は、目的の遺伝子を狙って切断してその働きを封じたり、必要な遺伝子を特定の位置に挿入する技術。偶然に頼る遺伝子組み換え技術より正確で効率もよいといわれている。すでに、野菜や水産物、畜産においても研究が進んでいるが、規制についての整備が追い付いていない。

環境省はゲノム編集技術の安全性について、カルタヘナ法に照らして専門委員会で議論し、特定遺伝子の切断だけ行ったものについては自然界で起こる突然変異と同等と考え、特別な安全審査をしないと決めた。しかし問題が起きてからでは遅い。今すぐ規制する必要がある。

産直畜産物の飼料用 non-GM（遺伝子組み換えでない）トウモロコシを安定的に確保するために

2018年9月16日～23日　組合員が米国のnon-GMトウモロコシ産地を訪問しました



種子会社パイオニア社の実験圃場で

グリーンコープは、産直畜産物の主飼料であるトウモロコシを、米国から輸入しています。しかし2000年代以降、米国では経済効率を優先したGM（遺伝子組み換え）トウモロコシの生産が急増し、non-GMトウモロコシの作付け（生産）が減少しています。

今後もnon-GMトウモロコシを安定的に確保するために、組合員が米国を訪れ、生産者や関係団体にグリーンコープ組合員の願いを直接伝える取り組みを、2014年から行っています。今年も、組合員の代表が米国を訪問し、私たちに必要なnon-GMトウモロコシを供給してもらえるよう、生産者をはじめ関係者のみなさんと交流し、想いを伝えました。

「遺伝子組み換え」とは？
生物がもともと持っている遺伝子に別の生物の遺伝子を組み込むこと。「種の壁」を越えて人間に都合のいい遺伝子を組み込み、自然界では誕生することのない新しい生物を作り出す。これまでの品種改良とは大きく違う。技術そのものと、それによってできたものの危険性、予測不可能なことが起きる可能性を指摘する専門家もいる。他の生物や環境、人体への影響も懸念される。
米国など遺伝子組み換え作物(以下、GMO)の一大生産地では、除草剤耐性や殺虫性の特性を持つGMOが長期的に生産されたことによって、除草剤に耐性を持つ雑草や農薬に耐性を持つ害虫が増え、除草剤や農薬の使用量が一層増えるという問題が起こっている。

米国non-GMトウモロコシ生産地を訪問した組合員の声

ひょうご理事長	山本 陽子さん
ふくおか南地域理事長	砥上 叔子さん
かごしま理事長	下本地 紀子さん
みやざき理事長	鈴江 信子さん

non-GMOを求める声を届け続けることが大切だとわかりました

※1 Moms Across Americaのゼンさん（写真中央）とも交流しました
写真右から、山本さん、※2全農の鈴鳴さん、ゼンさん、鈴江さん、下本地さん、砥上さん

今回の視察で貴重な体験と交流ができました。

米国の生産者は、何を栽培すれば収益が上がるかで生産する作物を決めており、生産者自身が食品を買う時もnon-GMOにはこだわらない方が多いそうです。種子会社もこのような種が作りたいというより、生産者が作りたいものを売ると言われたことがショックでした。だからこそ私たちは、生産者、種子会社、集荷会社、輸出会社それぞれに、この先もnon-GMOの需要があることを訴えていくことが大切だと感じました。

生産者らの収益第一主義は一見ドライと感じましたが、訪問した会社や農家には、社会的信用が確かにあることも分かりました。今後もMoms Across Americaと情報交換しながら活動を続け、non-GMO市場を少しでも拡大していきたいと思いました。

※2全国農業協同組合連合会。グリーンコープのnon-GMトウモロコシの国内取引先。穀物商社

Moms Across America 専務理事 ゼン・ハニーカットさんコメント

私たちはGM食品の消費や生産を減らすために、一緒に取り組んでいく必要があると切に思います。
皆さんがどんな取り組みを行う場合でも、私はサポートを惜しみません。

※1米国でGMOに反対する母親の会。グリーンコープはゼンさんと2016年から交流を続けている

グリーンコープの主な畜産飼料はnon-GMO

グリーンコープは、予防原則の立場から、安全性が確認されておらず人体や環境への影響が懸念されているGMO（遺伝子組み換え作物）を極力使っていません。食料自給率が低く世界一のGMO輸入国である日本の中にあって、グリーンコープは1998年から畜産飼料のnon-GMO化に取り組んでいます。現在、産直肉、産直たまごの母鶏、産直びん牛乳の母牛の飼料はほぼすべてnon-GMOを実現しています。

グリーンコープの飼料のうち、50%前後が米国産のnon-GMトウモロコシで、その量は年間約1万8千トンに上ります。

米国のトウモロコシ生産の現状

米国で生産されるトウモロコシの9割以上がGMOであるのが現状です。米国でも市民によるnon-GM食品を求める機運が高まり、市場ではnon-GM食品が目立つようになってきました。しかし、食品の原料として生産されるトウモロコシの割合はわずかで、畜産飼料やバイオエタノール原料として生産されるトウモロコシが大部分を占めています。そしてそのほとんどがGMOです。

このままでは、グリーンコープが今後も安定してnon-GMトウモロコシを確保できるか分からない状況です。

市中のスーパーマーケットでは、non-GMOやオーガニック食品にそれを示す表示をつけ、消費者が選べるようになっている

パイオニア社の実験圃場で説明を受ける

相場や社会状況に左右されるnon-GMOの生産

グリーンコープは飼料穀物の輸入を、国内の穀物商社を通して行っています。現地の集荷会社はnon-GM穀物生産者を組織し、種子の選定～栽培～収穫までの生産管理と収穫後の保管管理まで徹底した管理システムを確立しているので、直ちにnon-GMトウモロコシが確保できなくなる心配はありません。

現在は米国市場でのトウモロコシの相場価格が安いため、生産者は安価なnon-GMトウモロコシの種子を選ぶことが多く、non-GMトウモロコシの生産は少ないながらも安定しています。しかし、相場に左右されるからこそ、今後の見通しは不透明とも言えます。

non-GMトウモロコシはしっかり分別管理されており、保管するエレベータでも専用入荷口がある

non-GMOを望む声を組合員が直接伝える

グリーンコープは2014年から、米国のnon-GMトウモロコシ生産者と関係団体を訪問し、感謝の意を伝え、今後も継続して供給をお願いする取り組みを続けています。

米国の関係者にとって重要なことは、今後も需要が確実にあり、利用が見込めること。特に種子会社は、1品種の開発に10年先を見据えた判断が必要です。だからこそ、non-GMOの需要があり、供給を強く望んでいることを継続して訴えていくことが重要です。

今回の訪問でも、組合員が、生産者、種子会社、集荷会社、輸出会社を訪問し、グリーンコープはこれからもずっとnon-GMトウモロコシを必要とし利用し続けたいという強い思いを、それぞれの立場の人々に直接伝え、今後も引き続き供給してもらえるよう要望しました。

米国側の関係者も、グリーンコープからの要望がある限り、生産と供給を続けていくと応じました。

生産者のブランドンさん（右から3人目）
「GMOの普及により、ほとんどの雑草が農薬に耐性を持つようになった。GMOを育てるメリットはあまりない。non-GMトウモロコシ種子のほうが安いし、収穫量もGMと変わらない」

Protein/Trade Name	Sensitivity	
Cry1Ab/Bt11, YieldGard Corn Borer	0.8%	(~6 kernels in 800)
Event 603/Roundup Ready	0.5%	(4 kernels in 800)
Cry3Bb1/YieldGard Rootworm	0.5%	(4 kernels in 800)
Cry1F/Herculex I	0.5%	(4 kernels in 800)
Cry1Ab/Bt Xtra	0.5%	(4 kernels in 800)
Cry34/Herculex RW	0.5%	(4 kernels in 800)
mCry3A/Agrisure RW	1.0%	(8 kernels in 800)
Cry2Ab/ YieldGard Plus (MON89034)	1.0%	(8 kernels in 800)
Vip3A/Agrisure	0.25%	(2 kernels in 800)

集荷会社では各メーカーのGM技術に合わせて9種類のGM検査をしている

※GMOの種子は生産コストがかかるので、価格も高い